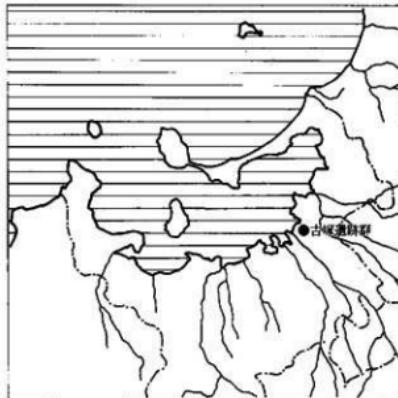


# 吉塚 7

—吉塚遺跡群第7次調査の概要—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第665集



遺跡略号 YSZ-7  
遺跡調査番号 9908

2001

福岡市教育委員会

## 序

古くから大陸文化受容の門戸として栄えてきた福岡市内には、多くの史跡や文化財が分布しています。本市では、こうした文化財の保護・活用に努めているところですが、各種の開発事業によってやむをえず失われる遺跡については、事前に発掘調査を実施し、記録保存を行っています。

本書は、博多区吉塚3丁目地内で、共同住宅建設に先だって発掘調査を実施いたしました吉塚遺跡群第7次調査の報告書です。

発掘調査では、弥生時代から平安時代にかけての集落跡が検出され、多くの貴重な資料を得ることができました。調査の結果、この遺跡では弥生時代以来途切れなく人々が生活していたことが分かりました。また朝鮮半島からもたらされた陶質土器がいくつか出土するなど、まさに大陸文化受容の一端を扣いた遺跡であることが分かりました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査費用の負担をはじめとするご協力を賜りました安武昭氏をはじめとする関係各位の方々に、感謝の意を表します。

平成13年3月30日  
福岡市教育委員会  
教育長 生田 征生

## 例 言

- 1、 本書は、福岡市教育委員会が、平成11（1999）年4月12日から同年5月29日まで発掘調査を実施した、共同住宅建設に伴う吉塚遺跡群第7次調査の報告書である。
- 2、 本書に用いる方位は磁北である。調査区の座標は任意のものである。また調査区内のレベルは吉塚小学校の国土地理院水準点の標高から移動したものである。
- 3、 本書に用いる遺構図は、久住猛雄、西堂将夫、津曲大祐、西山めぐみが実測・作成した。遺物の実測は、西堂、津曲、坂田邦彦、鏡ヶ江賢二、上方高弘、久住が行った。現場写真および遺物写真は久住が撮影した。製図は、廣田容子、上方、平川敬治、常松幹雄、西堂、久住が行った。
- 4、 本書の編集と執筆は久住が行った。
- 5、 本調査に関わる遺物・記録類（図面・写真）は、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理される予定である。
- 6、 裏表紙写真は吉塚遺跡群第7次調査出土陶質土器である。

## 目 次

I	はじめに	1
II	遺跡の立地と地理的歴史的環境	1
III	調査の記録	6
IV	おわりに	24
V	写真図版	25

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第665集  
「吉塚7」正誤表

ページ	行	誤	正
2	13	「貨泉」	「貨泉」
3	22	「貨泉」	「貨泉」

## I. はじめに

### 1. 調査に至る経緯

平成11（1999）年1月29日、安武昭氏より、博多区吉塚3丁目355-6番地における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前審査願が福岡市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。申請地は、吉塚遺跡群として周知されている範囲の北端にあたり、周辺の調査成果からも弥生時代から中世までの遺構の存在の可能性が推定された。埋蔵文化財課では関係者と協議の上、平成11年3月2日に同地の試掘調査を行った。その結果、地表下1m前後に柱穴や土坑などの遺構が良好に遺存していることが判明し、周囲と同様の遺構群の広がりが確認された。この試掘調査の結果をもとに、遺跡の取扱いについて関係者と協議を行った。その結果、共同住宅建設の敷地部分について、記録保存のための発掘調査を実施することになった。そして、安武昭氏の受託調査として、2000年4月12日より発掘調査を開始した。発掘調査は、同年5月29日に終了した。

なお、整理作業は2000（平成12）年度に行い、報告書を作成した。

### 2. 調査の組織

調査委託 安武 昭

調査主体：福岡市教育委員会 教育長 西憲一郎（調査年度）、生田征生（整理年度）

調査総括：埋蔵文化財課 課長 山崎純男

調査第二係長 力武卓治（調査年度）、調査第一係長 山口旗治（整理年度）

調査庶務：文化財整備課 宮川英彦

試掘調査：埋蔵文化財課事前審査係 中村啓太郎、屋山 洋

調査担当：埋蔵文化財課調査第一係 久住猛雄

調査作業：木田ひろ子、柴田常人、尊田絹代、高木美千代、田中和祐、田中翠、田中弘子、徳永洋二郎、鳥居原良治、中山竹雄、平山栄一郎、西堂裕夫、津曲大祐、西山めぐみ

整理作業 成清直子、平井裕子、甲斐田嘉子、高田輝子、廣田容子

## II. 遺跡の立地と地理的歴史的環境

### 1. 吉塚遺跡群の立地と周辺の遺跡群について

吉塚遺跡群は、博多湾岸の幾重にもなる砂丘列の最後尾の列の古砂丘上に立地する。西の海岸側の次の砂丘列には堅船遺跡群があり、吉塚遺跡群の南東は後背湿地となっている。遺跡群の東側で調査地の南側には、平安時代初めの建立と伝える東光院がある。本調査地は遺跡群想定範囲の北東端にあたり、現在の標高は4.0m前後を測る。

以下では、周囲の砂丘上に立地する遺跡群とその歴史的環境について概観したい（図1）。なお吉塚遺跡群については後述する。豊遺跡群は、吉塚遺跡群の南側に遺物散布地として想定されている。砂丘群の後背湿地上となるが、数度の試掘調査にもかかわらず遺構が検出されていない。後世の上砂の移動などによる二次的な散布地の可能性も考慮すべきか。ただし立地的に次の櫻田遺跡のような水田遺構が存在する可能性も考慮されるか。櫻田遺跡群は豊遺跡群の南東に位置し、沖積微高地上に位置する。試掘調査から低湿地の地形環境に弥生時代以降の水田が広範囲に存在すると推定される。東比恵三丁目遺跡は櫻田遺跡の西にあたり、御笠川下流右岸の自然堤防背面の低湿地に弥生時代の水田が広がっている（福岡市埋蔵文化財調査報告書第636集）。水田は弥生時代中期前半に成立し、後期前

半の洪水で放棄されたらしい。小区域水田の水掛かりのありかたは、水田区画部を多角形状とするものの存在や、河川側からの放射状の畦畔の配置は弥生時代では稀な高度な水田技術であることが注目される。報告書でも指摘されているように、周囲の集落遺跡の時間的な消長や水田の規模からしても、巨大集落である比恵遺跡群の生産基盤とみられる。また櫻田遺跡はこの東比恵遺跡に連続している水田遺跡の可能性がある。吉塚本町遺跡は次の堅粕遺跡群の北、現在のJR吉塚駅周辺に位置する。これまで4次の調査を実施し、弥生時代から奈良時代の遺構と遺物を検出している。飛鳥時代（7世紀）から奈良時代が集落の盛衰期間とみられるが、それ以後の遺構の検出は激減する。製塙土器や土鍤のような海に関連する生産用具の出土が多い一方で、奈良時代では瓦や陶も出土し、何らかの公的施設の存在も考えられる。堅粕遺跡群は吉塚遺跡群の一つ海側の砂丘上に立地する。9次の調査を実施している（ただし2次調査は欠番）。弥生時代から平安時代前半期（9~10世紀）までの遺構が検出されている。調査状況から遺跡群は東西二つの遺跡として把握すると理解しやすく、砂丘列も別々かもしれない。西側（1,3,6,7,8次）では、弥生時代中期初頭の遺物からあり、弥生時代終末から古墳時代前期までの遺構・遺物が多い。中でも、「貨泉」（1次）、古墳時代初頭の方形周溝墓（3次）、東海系S字状口縁壺と古備系甕の出土（8次）、滑石製玉類を納めた壺（古墳前期後半）（8次）、銛頭壺の一括埋納（福岡県教育委員会調査・報告）などが注目される。遺跡の時期や内容から西に位置する博多遺跡群との関連が濃厚である。西側の遺跡では、古墳時代後期から奈良時代の遺構・遺物もあるが概して少ない。東側（4,6,9次）では、弥生時代後期から古墳時代前期の遺物もあるが頗るではなく、古墳時代後期から平安時代前半期の遺構が連続的で遺物も多い。古墳時代後期では馬具を出土した土塙墓（4次）や耳環の検出（9次）、奈良時代から平安時代では移動式竈・越州窯系青磁・綠釉陶器・瓦・墨書き土器の出土が注目される。古代の遺構には方形区画をなすと考えられる溝もあり、出土遺物とあわせて公的施設が存在した可能性が高い（第274集）。なおこの報告書の「3・4次」調査は調査番号の整理により現在一括して「4次調査」としている。第590集参照）。また東側集落の様相は吉塚遺跡群に連なる可能性がある。吉塚祝町遺跡は近年遺跡の存在が判明した（第624集）。堅粕遺跡群の東、吉塚遺跡群の北に位置する。立地的には堅粕遺跡群東側遺跡に連なる砂丘列上にある。弥生時代中期の発掘や古墳時代中期の住居があるが、遺跡の様相が明らかになるのは古墳時代後期以降である。6世紀後半から7世紀前半の古墳周溝・横穴式石室・土塙墓・石棺墓が検出されている。7世紀後半以降は集落になるとみられ、古代には竪穴住居（奈良時代）と掘立柱建物が展開するようである。越州窯系青磁の出土が目立つことや石製壺の検出から、何らかの公的施設の存在も予想される（報告者は慎重な態度である）。古代後半も遺構が継続し、中世の遺構も多い。ただし遺構の展開には消長があり、11世紀後半と13~14世紀前半の遺構が多く、間の時期はやや少ない。上師器の多量廃棄遺構、畿内瓦器と古瀬戸の出土が注目され、道路状遺構もあり、中世都市「博多」の衛星都市的な街場の存在の可能性を調査者は指摘している。今後注目すべき遺跡である。箱崎遺跡群は吉塚本町遺跡の北にあたり、南北に長い砂丘上に展開する。箱崎宮の創建（923年）を端緒に对外貿易の拠点都市が形成されるが、遺構が頗るになるのは11世紀後半以降で博多遺跡群の中世都市の展開と類似している。12世紀後半から13世紀前半の遺構・遺物が特に多く、その後の遺構はやや減少するが、街場自体は現在に続いている。近年の調査で砂丘東側斜面にあたる地区から古墳時代初頭の遺構が多く検出されつつある。韓半島南部系・中西部瀬戸内系・近畿西部系土器の搬入品がみられ、出土土器の様相は筑前型庄内甕や北部九州型布留甕を多く出土するなど在地産の畿内系土器が大半で、堅粕遺跡群や博多遺跡群の様相に近い。ただし伝統的V様式系がやや目立つのはそれら二遺跡と異なる（第591集）。また方形周溝墓らしき遺構も検出されており（2000年度調査）、土器の様相とともに同時期の博多遺跡群のミニ版的様相を示す。博多遺跡群・堅粕遺跡群・箱崎遺跡群や西新町・藤崎遺跡群等における博多湾岸の砂丘遺跡において古墳時代初頭前後の列島内外（韓半島系を含む）各地の土器の搬入

品が多数出土する状況から、列島における対外交易の中心地域とみなしそうな当時の交易システムを「博多湾貿易」とする評価もある（白井克也2001『勒島貿易と原の辻貿易』『弥生時代の交易』—モノの動きとその扱い手— 第49回埋蔵文化財研究集会）。問題は、これらの遺跡群が衰退する古墳時代前期後半以降の対外交易の拠点が何處に移ったかである。この点で今回の吉塚7次調査の成果は示唆的な材料を提示している。次に、博多遺跡群は中世を代表する対外交易の中心としての港湾都市遺跡として知られ、多種多量の貿易陶磁器の出土は有名である。弥生時代中期には博多浜砂丘に集落と壺棺墓地が成立し、弥生時代後期後半には他の博多湾の砂丘上の遺跡群に先駆けてすでに外来系土器が目立つ傾向がみられる。古墳時代初頭には一大拠点となるが、集落は古墳時代前期中頃には急速に衰退し、以後墓地化する（第667集参照）。6世紀後半より集落が再開発し、7世紀後半には高句麗系土器（17次）が出土するなど特殊な拠点となった可能性がある。奈良時代から平安時代前期（8~10世紀）では、正方位に区画する溝群が博多浜砂丘中央に成立するほか、石帶・銅製帶金具・墨書き土器・鏡・皇朝十二錢・鴻臚館式瓦などが出土し、越州窯系青磁・長沙窯系青磁・邢州窯系白磁・イスラム陶器や綠釉陶器・灰釉陶器といった輸入陶磁器・国産陶器の出土傾向は鴻臚館に準じ、「鴻臚中島館」といったような交易を司る官衙があったとされている。11世紀以降は鴻臚館の衰退とともに中国商人を中心とする民間貿易の中心として博多遺跡群の内容が質量ともに増大し、中世都市「博多」に発展する。また13世紀末の元寇以後は、鎌倉幕府の鎮西探題が置かれ、大宰府の衰退に替わって政治的な中心としての性格も有するようになる。以後、北部の島の浜砂丘にも都市が拡張し、道路や街割りの整備と変遷を経て現在に至っている。

## 2. これまでの吉塚遺跡群の調査（図2）

以上のような、特に対外交易の拠点としての特色を有する周辺遺跡に囲まれた吉塚遺跡群のこれまでの調査成果の概要を見てみよう。第1次調査は、遺跡の想定範囲の東部に位置し、1,374m<sup>2</sup>を調査している（第202集）。遺構の時期は弥生時代中期から中世に及ぶ。「貧泉」や古墳初頭の山陰系大型瓶形土器の出土が注目される。遺構506号からは大量の古墳初頭の土器群が出土したが、先述の博多湾岸の砂丘上の遺跡群と比べ、在地系土器が目立つことが注意される。溝365号では布留式系と共に伝統的V様式系も出土し、箱崎遺跡に似た様相が見られる。また同じ溝365号の上層では古墳時代前期後半から中期の土器も出土し、この時期にも遺跡が継続する点で、他の博多湾岸の砂丘上の遺跡群とは様相を異にする。陶質土器や多孔の瓶形土器が出土していることも注目される。なお本調査での遺構検出面は、地点によっては2面設定されている。第2次調査は遺跡の中央西側で337m<sup>2</sup>を調査している（第464集）。遺構密度は高く、複雑に重複している。竪穴住居（古墳前期）、各時代の土坑・柱穴、古代~中世の井戸・掘立柱建物・溝などが検出されている。弥生時代中期~後期の遺物もあり、袋内ないし瀬戸内系の四線文のある壺形土器（弥生中期後半）も検出された。古墳前期は布留式系土器が包含層から多く出土しているほか、SK19からは古墳初頭の伝統的V様式系のセットが検出されている。また古墳時代後期から飛鳥時代の土器には外面タタキをもつ「赤焼土器」ないし似非須恵土器が多く、韓式系土器まがいの縄文土器もあることが注目される。これは7次調査（本報告）と同じ傾向である。古代は8世紀後半が多く、9~11世紀の遺構が若干ある。中世は遺構はあるが量的に少なくなる。第3次調査は、第2次の西隣であり、310m<sup>2</sup>が調査された（第553集）。遺構の時期は弥生時代中期末（後期初頭）の土坑、8~9世紀の溝・井戸・柱穴、12世紀の溝・井戸、15世紀の溝などである。搅乱・削平が著しく遺構の残りが悪かったが、包含層から滑石製櫛（分櫛）が、12世紀のSE08から磁州窯系白釉黒花陶器片が出土した。古墳初頭のPit31では在地系と伝統的V様式系の鉢が共存している。第4次調査は遺跡の中央西側の北西縁付近で289m<sup>2</sup>が調査された（第552集）。遺構の密度は高い。検出遺構は、弥生時代後期初頭~前半の土坑など、5世紀末の土坑、7世紀の土



図1 吉塚遺跡群の位置と周辺の遺跡 (1/30,000)

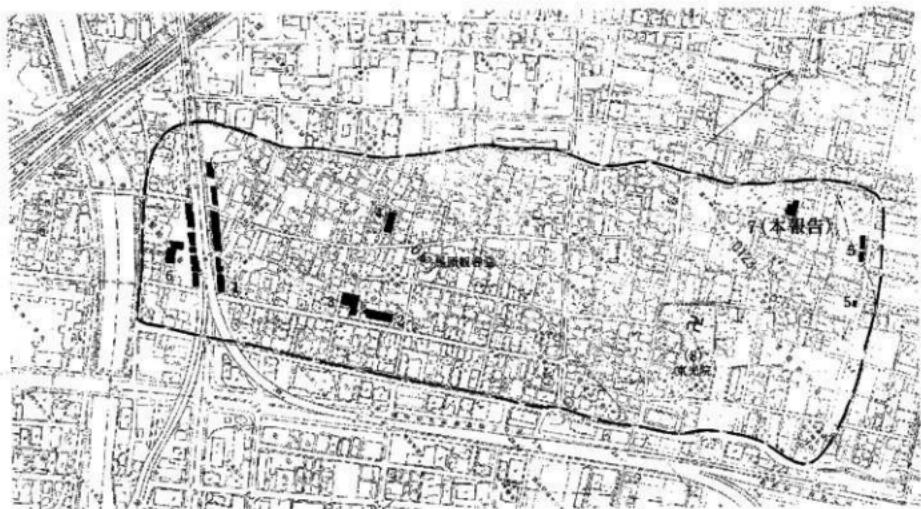
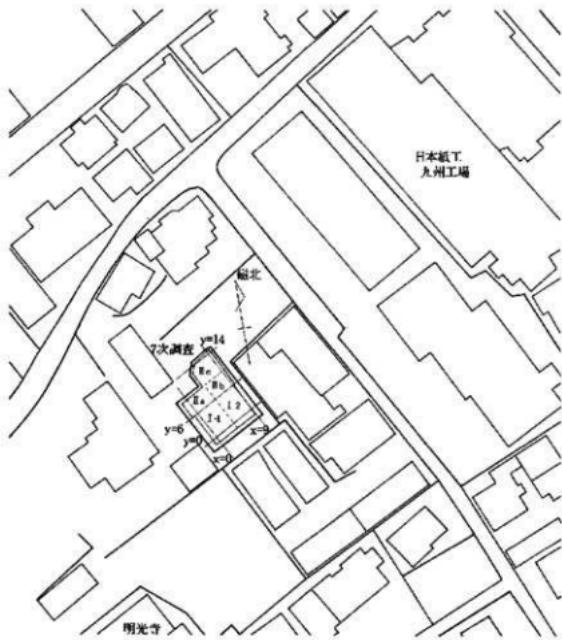


図2 吉塚遺跡群各調査地点の位置 (1/6,000) \*数字は次数

坑・井戸・柱穴、12~13世紀の土坑・井戸・柱穴がある。7世紀代と中世前期が主体のようである。古墳時代前期と奈良時代は遺物がわずかに存在するが確実な遺構は無く、両時期の欠落は他の調査地点とは様相が異なる。第5次調査は、遺跡の東縁で250m<sup>2</sup>を調査している（第554集）。遺構・遺物は、弥生時代終末~古墳時代初頭、6世紀後半~7世紀前半、10世紀、13世紀に分かれるが、遺構のピークは、出土遺物の量から6~7世紀と13世紀が考えられる。なお本調査では遺構検出面は2面設定されている。7世紀初頭頃のSE17の埋土により花粉分析・種実同定・植物珪酸体分析が行われ、周囲には水田と若干の畠地が存在し、草本科植物が卓越する樹木の少ない草原や湿地からなる人里環境であったと推定されている。第6次調査は遺跡の西縁にあたり、358m<sup>2</sup>を調査している。遺構密度は比較的高く、弥生時代後期~古墳前期初頭、8世紀、13~14世紀の各時期の土坑・井戸・柱穴が検出されている。弥生時代の甕棺片の出土から（遺構は後世のもの）、弥生中期の遺構の存在も考えられる。弥生後期の銅鏡3点と「西甫」と墨書きされた13世紀の白磁の出土が注目される。遺物の報告が待たれる。

以上のように吉塚遺跡群は、地点による消長はあるものの、遺跡群全体としては弥生時代中期以降中世前期に至るまで断絶があまりないことが特徴的である。特に古墳時代中期における遺構の継続が特筆され、また古墳後期から飛鳥時代の諸種のタタキを有する似非須恵土器（赤焼土器）出土が注目される。なお中世後期（14世紀中頃以降）の遺構は激減するようである。これと14世紀代の造立が中心と考えられる板碑が吉塚遺跡周辺に多いことと関連づけ、中世都市「博多」の聖域になった、とする考え方もある（第552集「第三章まとめ」）。今後の検証が必要だが興味深い仮説である。今後の調査成果から詳しい状況が判明する部分も少なくないであろう。



### III. 調査の記録

#### 1. 調査の経過と概要

調査は平成11年4月12日より開始した。同日に機材を事務所に搬入し、また重機による表土掘削を開始した。なお調査対象地は狭く、廃土置場のスペースの問題から反転調査となり、南半分をⅠ区、北半分をⅡ区とした(図3)。まず調査はⅠ区から行った。重機による掘削で地表下80~90cm前後で古墳時代から古代の遺物包含層に達し、以下は人力で掘削を行った。遺物包含層は小片が多いものの遺物量は多く、結果として報告するように多様な遺物が出土した。包含層を20cm前後下げたところの砂丘面で遺構検出面としたが、遺構は予想を超えて稀に見るほどきわめて濃密で(図5)、複雑に重複していた。このため遺構確認・遺構掘削・図化作業・ベルト部分掘削・図化作業、といった工程を繰り返し行う必要のあるところが多く、調査の進行が当初想定したほど思うように進めることができなかった。Ⅰ区の調査は、予定では4月末までに終了する予定であったが、黄金週間の休日も返上して作業する形で5月5日に終了した。5月6・7日に重機による掘削反転作業を行い、5月8日からⅡ区の調査に入り、包含層の掘削を行った。5月11日にはⅡ区の遺構検出を開始したが、やはりⅠ区と同様にきわめて濃密な遺構が検出された。当初の調査予定契約期間は5月21日であったが、もはや期間内の終了は無理と判断し、調査期間を延長する必要が生じた。そのため5月12日には調査期間の延伸について、調査を委託した安武昭氏との間に協議がもたれ、同氏の埋蔵文化財に対する深いご理解により、結果として5月末まで調査期間を延長するということで合意を得た。その後も工程上の余裕はなかったが、5月28日に調査区での作業を終了、機材撤収を行い、5月29日は重機による埋戻しを

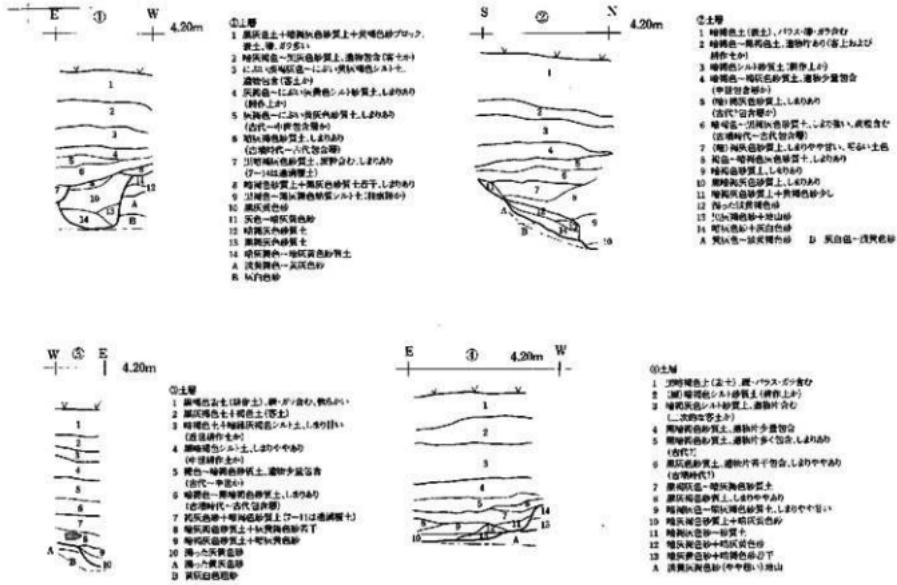


図4 調査区壁面土層図(1/40) \*①~④は図5参照

①～④は土壠番号(図4)

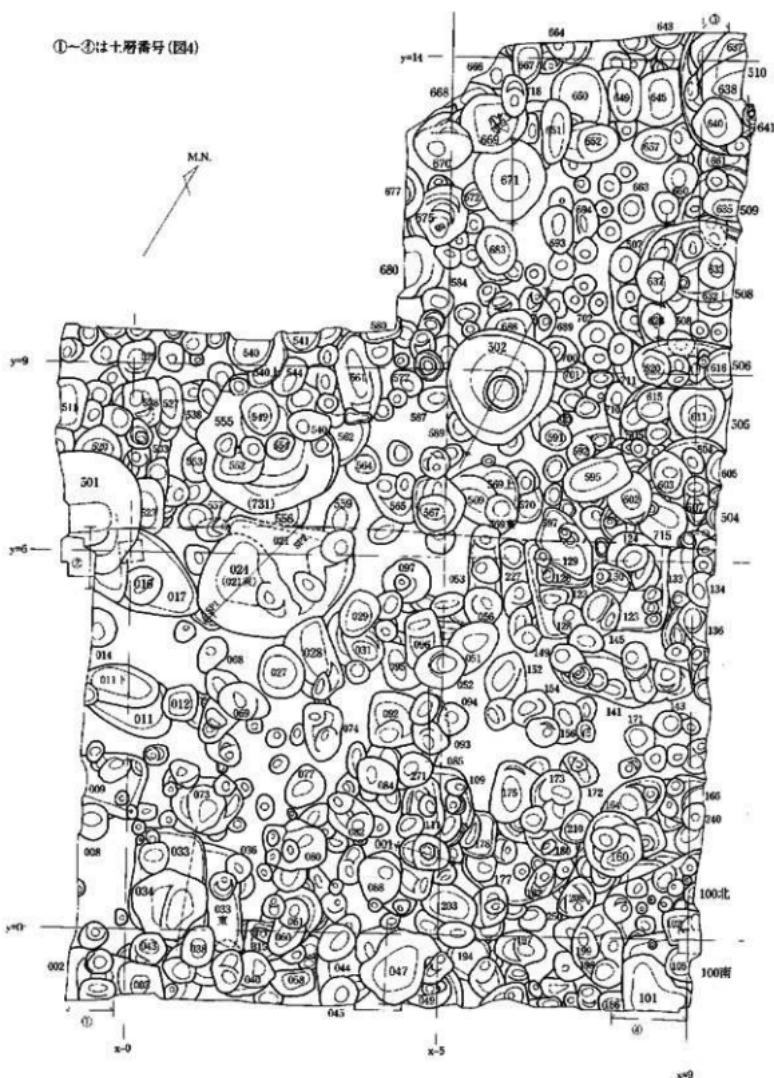


図5 吉塙7次調査全体図 (1/80)

行い、現場作業を終了することができた。

調査面積は約145m<sup>2</sup>であるが、これは下端での調査実面積であって、地表面での調査掘削面積は約181m<sup>2</sup>（記録上の調査面積）となっている。これは調査地が砂地の地山のため崩落の危険性があり、

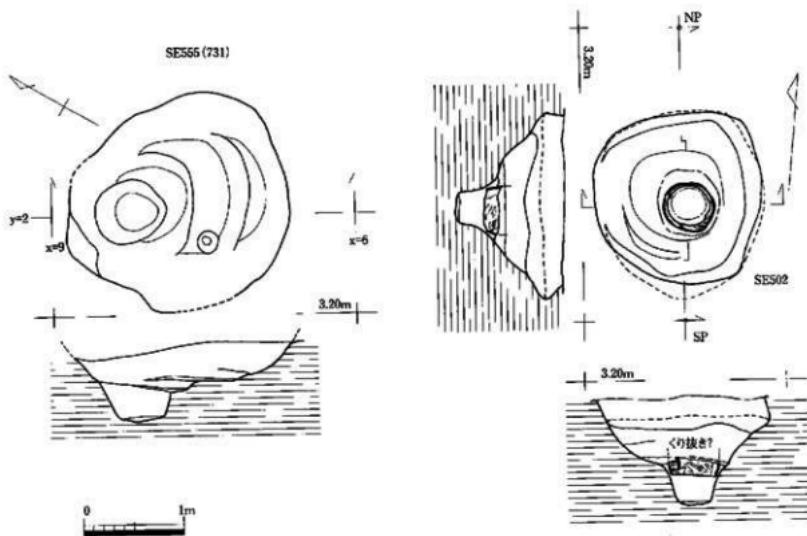


図6 井戸実測図 (1/50)

調査区壁を垂直に落とすことができず、若干の傾斜をつけた法面としたための結果である。

なお調査地付近の標高は4.0m前後である。地表下70~90cm前後で検出した包含層は黒みのある暗褐色の砂質土であるが、測査区南側では黒褐色氣味で、北側では茶褐色氣味である。また遺構検出面とした黄灰褐色砂のレベルは北側の方がわずかに高い傾向がある(調査区の層序は図4参照)。包含層からは古墳時代から奈良時代の遺物が多い。なおここで「包含層」としたものは、自然堆積もあるだろうが、きわめて濃密な遺構の上半分の覆土をかなり含むと考えられる(遺構の集合体としての包含層)。重複が多くて遺構が認識できなかったと思われる。ただし当初の包含層上面で、暗灰色または褐色氣味の遺構はプランは検出できたが、もともとの調査予定期間が2面の調査を想定していなかったため、結局は砂丘面での1面での調査になっている。これらの包含層上面確認遺構は奈良時代以降のものであろう。今回は条件的に1面の調査に甘んじたが、今後周辺では2面の調査条件を設定すべきであろう。検出遺構は井戸2基のほか、400基以上の土坑や柱穴であるが、著しい重複のため複数遺構の集合体を一つの遺構として当初掘削した場合もあり、遺構数は正確には把握しがたい。なお遺構検出面とした砂丘面の標高は2.8~3.0m前後である。

遺構の時期は、出土遺物から弥生時代後期を初めとし、中世前期の12世紀前後までがあるが、遺物の所属時期は9・10世紀がやや少ないものの途切れる期間が少なく、遺構の濃密さは1000年間近くの生活の痕跡によるものであろう。なお各遺構の時期認定にあたっては、基本的には出土遺物によるものの、複雑な重複があり覆土中の遺物には古い遺物が混じる可能性が大きいこと(実際に遺構の出土遺物は新旧混在している)、覆土の類似により上層に別の小遺構が掘り込まれていても全てを検出できたか不明なことなどから、その所属時期を断言できるものは少ない。調査中はほとんどの遺構について検出時の上面の土色や上質をチェックしたが、包含層上面検出遺構の土色の特徴のように、ある程度遺構の所属時期により異なる可能性があるが曖昧であり、今回は十分検討できなかつた。こ

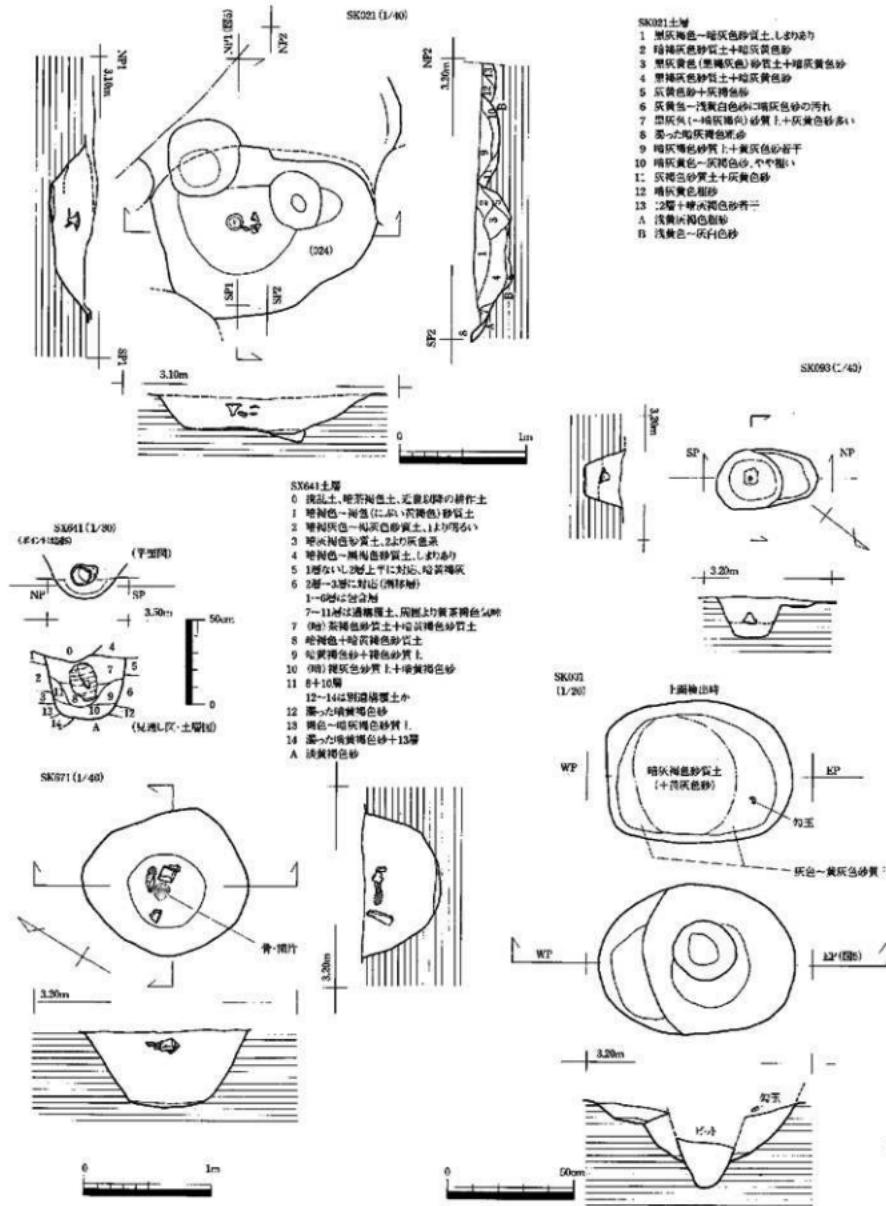


図7 SK021(024), SX641, SK093, SK671, SK001各実測図(1/40, 1/30, 1/20)

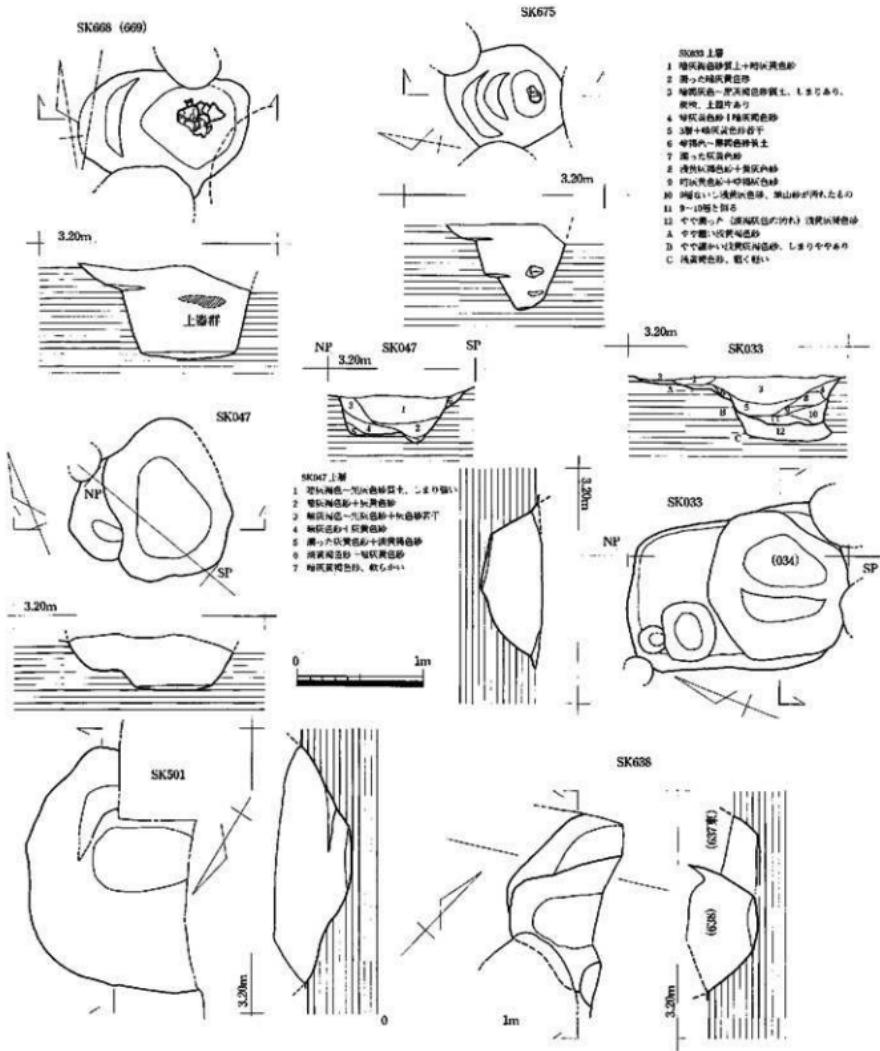


図8 SK668, SK675, SK047, SK033, SK501, SK638各実測図 (1/40)

の点は、本調査のような濃密な遺構がある場合の調査において今後よく検討すべき課題である。出土遺物は面積の割にやや多量で、総量でパンケース中箱30箱前後出土した。そのうち20箱分近くは包含層からの出土である。大半は土器類である。古墳時代から奈良時代の土師器・須恵器が多いが、弥生土器・平安時代の土師器・瓦器・焦土器・輸入陶磁器もあり、韓半島系の軟質土器や陶質上器もある。古墳時代後半期から飛鳥時代（一部奈良時代か？）の上師器には、須恵器と同様の製作技法を有する。

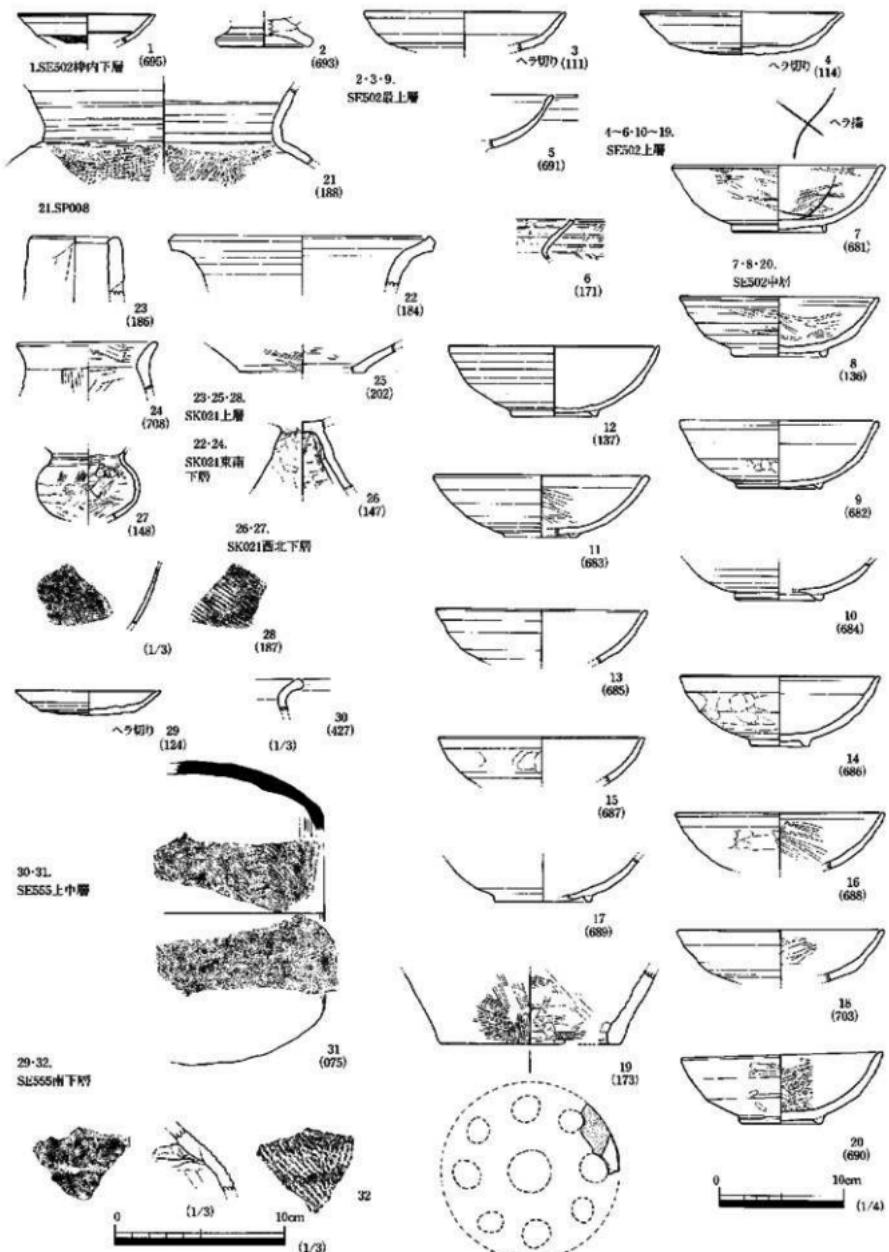


図9 各遺構出土土器・陶磁器 (1) (1/4, 1/3) \*特に記さないものは1/4

する似非須恵土師器（赤焼土器）が目立ち、外面タタキの個体が多く多様であることが特筆される。その他、鉄製品、石製品（砥石、滑石製勾玉など）、土製品（土錐など）、瓦も出土している。

以下では遺構の概要について報告するが、限られた紙幅と時間の都合上の問題もあるが、あまりにも多い遺構数のため報告できるのはごく一部であり、また柱穴も多すぎることと個々の時期の限定に問題が多く建物の復元には至っていない。また出土遺物も多種多様なものがあるが、小片が多く図示できたのは特色のある遺物群のうちのごく一部であることを断っておきたい。

## 2. 遺構の概要

**SE555** (図6左、図版4-13) IIa区で検出。2.2×2.1mの不整円形、深さ0.8m。井戸側（棒）は残存しないが、北側の深くなる部分をその痕跡と判断した。現在は湧水しない。11世紀前半か。

**SE502** (図6右、図版3・4-10-12) IIb区で検出。1.7×1.6mの略円形、深さ1.2m。覆土上層～中層では井戸側は残存しないが（図版4-12）、中央下層で木質の井戸側を検出した。残りが悪いが削抜きと思われる（曲物も考えたが留具や帶の痕跡がなかった）。底面は若干の湧水が認められた。上～中層に瓦器塊（黒色土器塊、白磁皿が共伴）の一括出土がある。11世紀後半の廃棄か。

**SK021** (図7左上、図版4-16) I-1区北で検出。当初一つの土坑と考えたが、土層の検討から複数遺構の集合のようである。南半分の土坑をSK024とした。**SK024**は1.2×1.8mの楕円形、深さ30～40cmを測る。古墳時代中期の土器群と、古墳後期の土器群がある。遺構は後者の時期か。

**SK093** (図7右中) I区中央で検出。土坑というより柱穴（SK）か。中層で古墳中期の高壙が出土しその下端を底面と考えたが、精査によりもう少し掘れた。柱抜取り後の埋置か。径50cmの円形掘り方の北に段（テラス）が付く。北側テラスの下からはSP227が検出された。

**SX641** (図7左中、図版4-14) IIc区で検出。土坑ないし柱穴に陶器壺が口縁部を下にしてうめられた状態の出土である。検出は遺構検出面よりも上で、重機による掘削の最中に気付いたため一部損傷してしまった。出土レベルと土層から、中世前期の生活面が3.3m前後にあったことが分かる。

**SK671** (図7左下、図版4-18) IIc区で検出。1.2×1.3mの円形、深さ65cm。上層で砾、砥石、獸骨（歯か）片などを出土。古墳時代土器が多いが、9～10世紀頃の内黒土師器・黒色土器・縁釉などを含む。なお遺物取り上げ時に誤ってSK669のものをSK671としてしまったものがある。

**SK001** (図7右下) I区中央南で検出。土坑というより柱穴。60×80cmの楕円形、深さ40cm。中央は柱抜取り痕跡であろう。上層で滑石製勾玉が出土。平面的な位置から掘り方にあり、柱を建てる時の祭祀か。なおこの遺構の覆土は全てふるいにかけたが他に玉類はなかった。古墳時代中期。

**SK669** (図8左上、図版4-15) IIc区で検出。上層西側テラスを遺構668としてしまっている。SK671、SK670に切られる（SK669が古い）。1.0×1.3mの不整楕円形、深さ80cm。中層で上師器の甕形土器などを出土。古墳時代中期初頭頃の土器が出土（重藤輝行・西健一郎1995のⅢA～ⅢB期）。なお遺物取り上げ時に誤ってSK669のものをSK671と注記したものがある模様（図11-25・27）。

**SK675** (図8左下) IIc区で検出。1.0×0.85mの楕円形、深さ70cm。北側が段状となり、土坑というより柱穴か。下層で砾石などを出土。奈良時代土器があるが、11～12世紀の瓦器塊を含む。

**SK047** (図8左中) I区南中央で検出。1.3×1.3mの不整合形状、西側は段状の立ち上がりとなり、深さ50cm。古墳時代後期から飛鳥時代（7世紀）の土師器片を含む。

**SK033** (図7左下、図版4-19) I-1区南で検出。1.2×1.8mの長方形で南半分が隅丸方形に落込み（SK034）、深さ50cm。SK034部分は別遺構とも考えたが土層から同一遺構か。底面は掘り過ぎている可能性がある。なおSK033（浅い部分）の上面プランは東へあと60cm広がり1.8×1.8mの正方形の豎穴状をなす可能性もある（図5、033東遺構）。

**SK501** (図8左下、図版4-17) IIa区で検出。西側が調査区外だが径1.9mの略円形プランであ

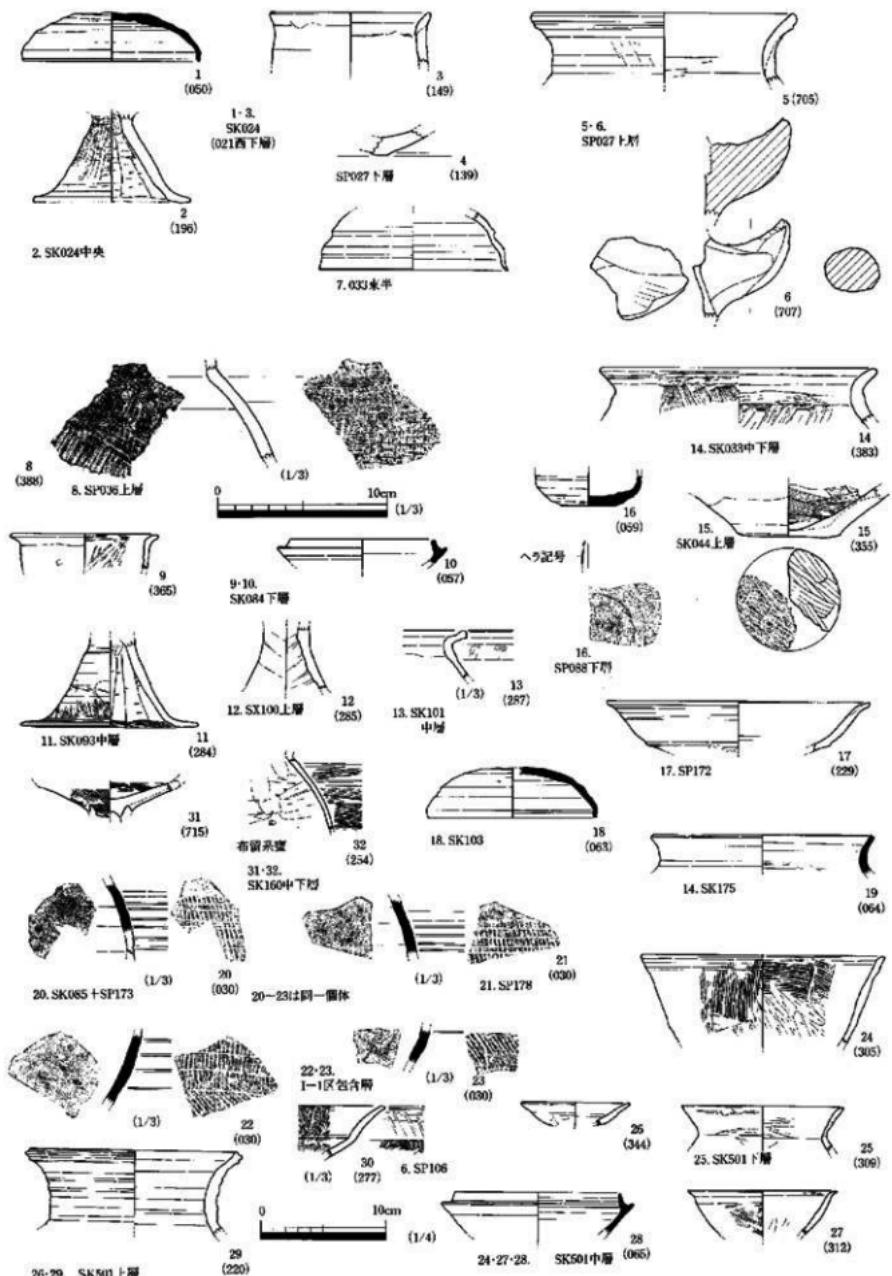


図10 各遺構出土器 (2) (1/4, 1/3)

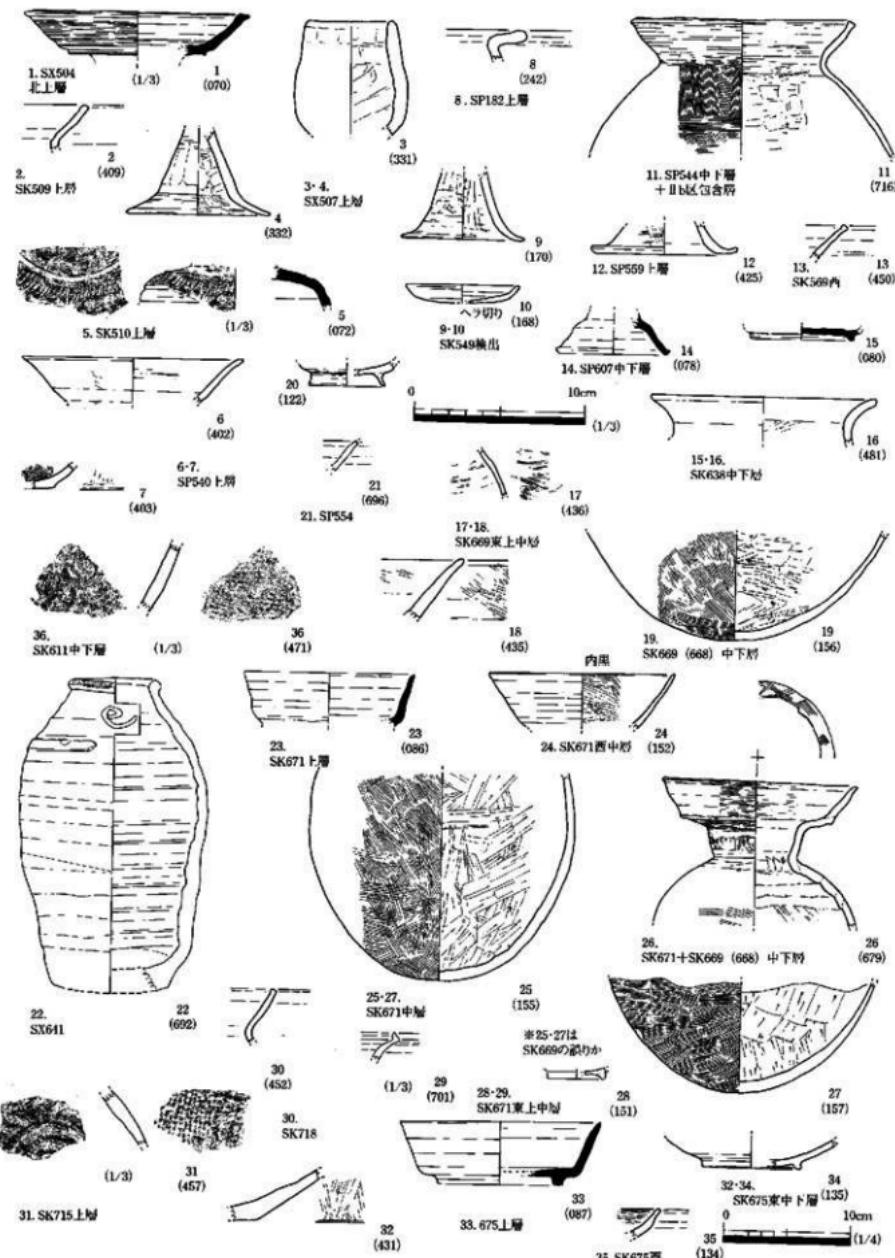


図11 各遺構出土土器・陶磁器 (3) (1/4, 1/3)



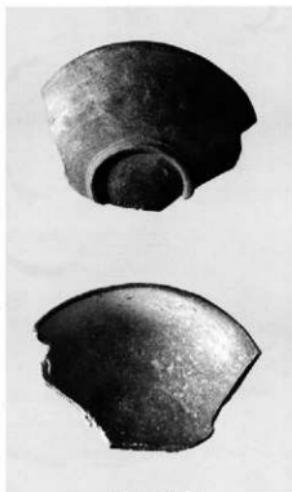
Ph.1 図11-29



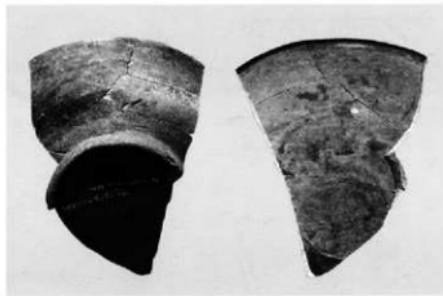
Ph.2 図11-22



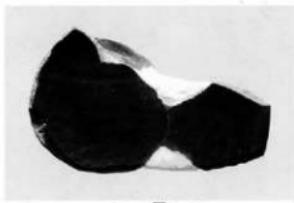
Ph.3 図9-7（上は内面）



Ph.4 図9-9



Ph.5 図9-8



Ph.6 図9-20

Ph.1~6 吉塚7次出土遺物写真（1）

ろう。断面すり鉢状で深さ60~70cm。土層は図4-②を参照。6世紀後半の土器を出土している。

SK638（図7左下、図版4-18） IIc区東の複数遺構の集合のSX510下で検出（なお021, 053, 055, 100, 123, 141, 504, 505, 506, 507, 508, 509などの各遺構も同様に複数遺構が集合していたものの上面検出遺構である）。SK637（6~7世紀の土器片が出土）を切る。東側は調査区外となるが、幅1.1mで断面逆台形、深さ60cmの溝状遺構となるか。7~8世紀の土器片が出土している。

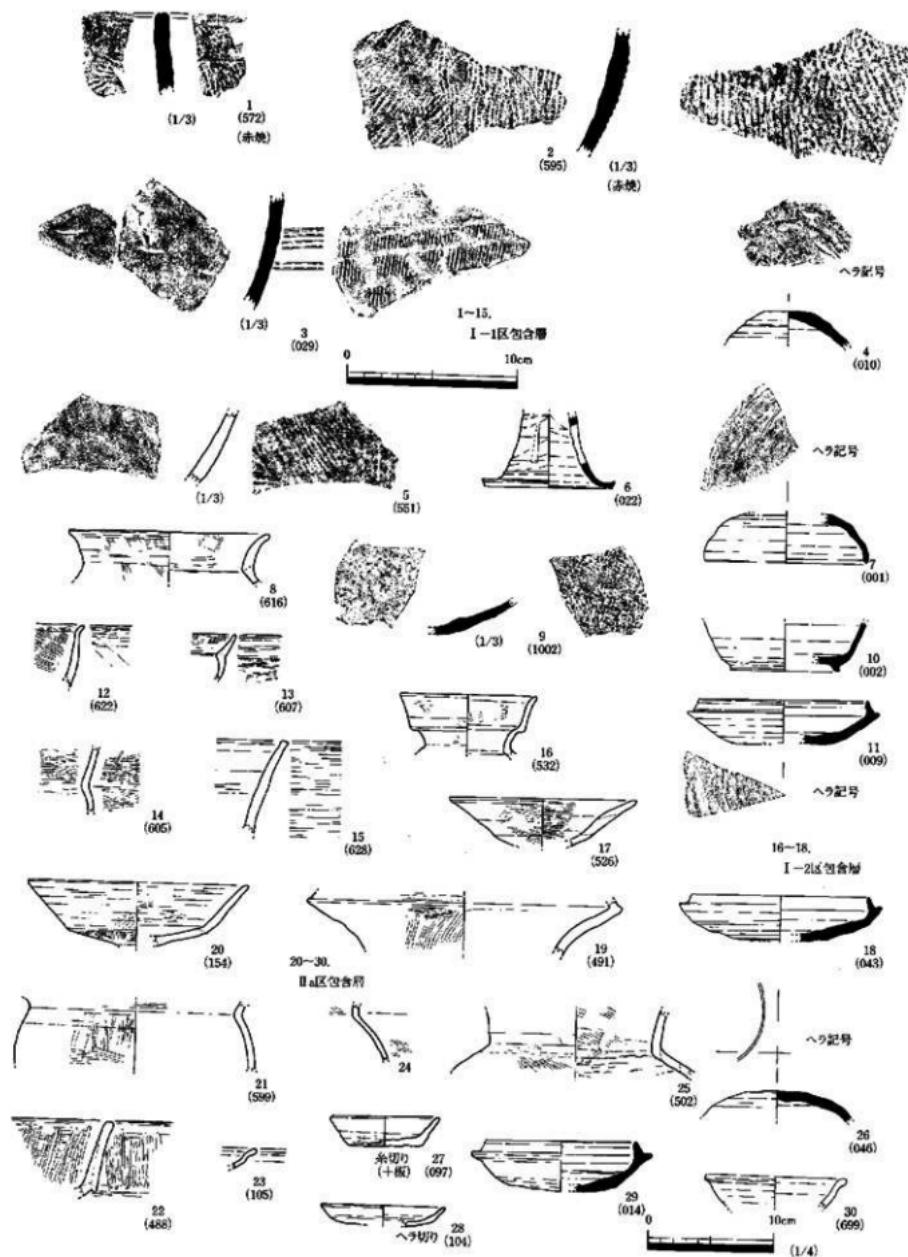


図12 包含層・遺構検出時出土土器 (1) (1/4, 1/3) \*1・2は赤焼土器で断面スリオリは折り

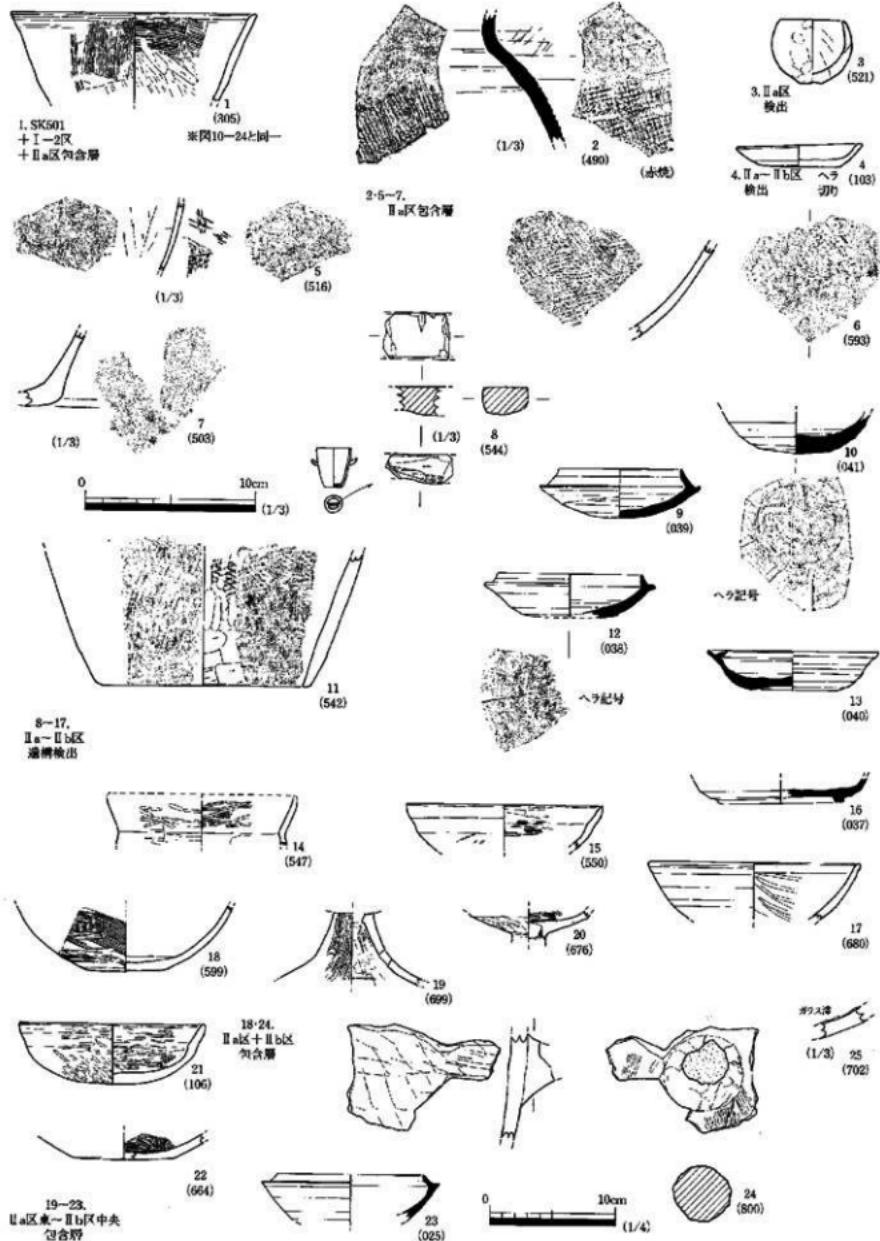


図13 包含層・造構検出時出土土器 (2) (1/4, 1/3) \*図は底面上面で断面スメリは誤り

### 3. 出土遺物（図9～17）

以下、出土遺物について記述するが、出土遺構と層位については図中に記した。また各図中の遺物番号の下の（ ）内は、収蔵予定番号（整理台帳番号）の下3桁（一部4桁）である。

（図9）1～20はSE502。1は白磁皿。2は緑灰色釉の陶器脚台部。3、4は土師器坏。5、7～18は瓦器碗（Ph.3～5）で全て筑前型。20は黒色土器（Ph.6）だが上師器質で内面と外面上部表面が黒色化。以上は11世紀後半。6は筑前型庄内窯の布留式占相併行の口縁部。19は土師器の瓶の底部破片。平底に小孔が多くある古相式で古墳中期。21は胴部外平面平行タタキ（ヨコ→タテ）の赤焼土器（古墳後期か）。内面は重弧文？当具痕。22～28はSK021。22は須恵器の甕とほぼ同じ形の赤焼土器。23は土師器の飯蛸壺。24は土師器の小型甕。25は古墳中期の土師器高环の坏部。26は古墳中期の土師器高环脚部。27は古墳中期前半の粗製の小型丸底壺。28は筑前型庄内窯の破片。29～32はSE555。29は土師器小皿で11世紀前半前後。30は弥生後期初頭前後の甕の口縁部。31は須恵器の推定横瓶の体部。砂礫を多く含む胎土で早良から糸島平野の古墳に見られるものに類似。32は外面繩文タタキ、内面無紋に近い浅い同心円文当具痕の赤焼土器。本調査では繩文文や格子目（擬似ではないもの）タタキの赤焼土器の出土が少なくなく、内面の調整や器形により韓式系軟質土器と区別している。（図10）1～3はSK024。1はⅢB期（小田富士雄編年）の須恵器坏壺。2は古墳中期の土師器高环の脚部。3は古墳後期の土師器の小型甕。4～6はSP027。4は一見弥生後期の底部だが、底面上げ底で畿内V様式系統技法（庄内式以降）のもの。弥生終末から古墳初頭。5は須恵器の甕と同様の技法の赤焼土器。6は土師器瓶の把手。7は須恵器技法の赤焼土器の坏壺。高环坏部の可能性もある。形態は須恵器と少し異なるがモデルはTK10（ⅢA期）のものか。8は外面擬格子タタキの赤焼土器。内面は平行文当具痕→ハケメカ。9は土師器の小型甕。10は須恵器の坏身でⅣ期前半。11は古墳中期の土師器高环。12は土師器の高环の脚柱部。外ナデ仕上げだが整形はロクロによる。13は弥生終末頃の甕の口縁部破片。内面ケヅリ後ナデ、口縁部の形態などから中部ないし西部瀬戸内系の可能性（Ph.9）。14は古墳後期頃の土師器の甕。15は弥生後期前半の甕の底部。16は飛鳥時代前半（須恵器Ⅳ期）の坏身の一類。17,31は土師器高环で古墳前期後半から中期前半のもの。18は須恵器の坏壺でⅢB期ないしⅣ期前半。19は陶質土器の甕の口縁部。内外丁寧なヨコナデ。やや暗い青灰色。20～23は19と同一個体と見られる陶質土器脚部破片（Ph.8）。外面平行文に近い細かい繩文タタキ後、ヨコの螺旋旋出線、肩部はナデ。内面は無文当具痕。24は土師器の鉢ないし瓶、6～7世紀か。25と27は古墳中期頃の土師器の甕（壺？）と鉢。26は古墳前期後半の小型器台のやや粗製のものか。28はⅢB期の須恵器坏身。24～29はSK501。29は須恵器の甕（壺）とほぼ同様の赤焼土器。6世紀後半～7世紀初頭か。30は弥生後期後半の高环の坏部。（図11）11は須恵器の甕でⅢB期前後。2は北部九州型布留甕の口縁部。3は飯蛸壺で古墳後期か。4、9、12は古墳前期末から中期の土師器高环の脚部。5は須恵器の甕。ⅢB期前後。6、18は土師器高环の坏部。古墳前期後半から中期。7は弥生後期中頃の甕の底部。8は弥生中期末の甕の口縁部。10は底部ヘラ切りの土師器小皿。11世紀代。11は北部九州型布留甕でⅢA期（久住猛雄1999）。13も11と同様の甕の口縁部だがⅡB期前後。14は須恵器の脚付坏などの脚台部とみられるが焼成や胎土・色調から新羅土器（陶質土器）の可能性もある。15は奈良時代の須恵器坏身。16は奈良時代の甕の口縁部。17～19、26はSK669（25・27はSK669出土を誤注記した可能性が高い）。17は北部九州型布留甕の脚部片。19は北部九州型布留甕の系統だが粗い作りとなった古墳前期末頃のもの。26は二重口縁壺。1次口縁が擬口縁状。胴部外面ミガキ様のナデ、内面は粘土紐痕残る粗い作り。器表面を黒色化している。古墳前期末（ⅢB期）頃（久住1999、重藤・西1995のⅢA期）。25、27は古墳前期後半以降の粗雑な甕の系統（重藤・西1995の甕AⅡ）。20は土師器の脚付甕。10世紀頃。21は白色の化粧土・灰茶色の胎土の陶器の碗。22はSX641の陶器壺。緑灰色の釉。博多分類の陶器B群の長瓶の一種か。12世紀。23～29はSK671出土。23は8世紀後半の須恵器坏身。24は内面黒色土師

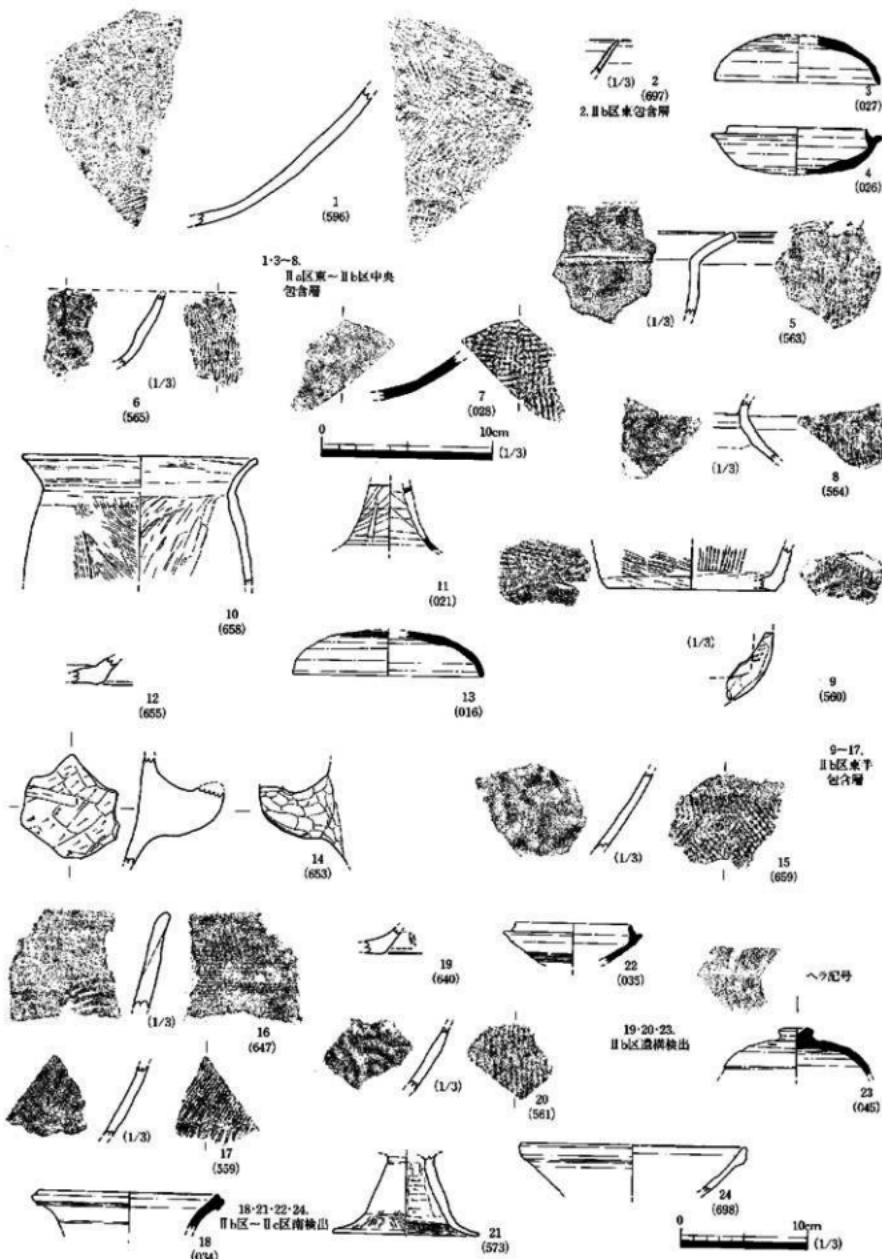


圖14 包含層・遺構検出時出土土器・陶磁器 (3) (1/4, 1/3)

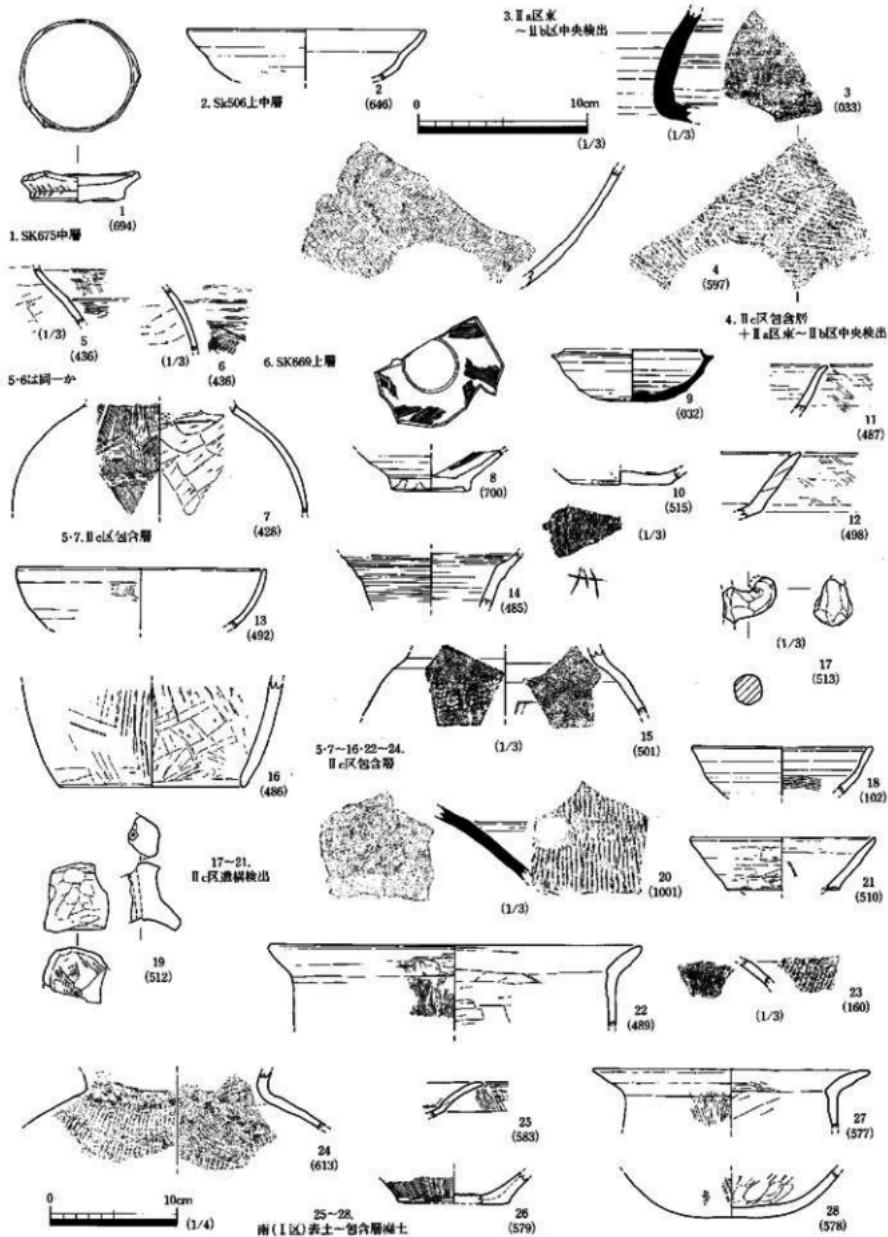


図15 包含層・遺構検出時出土土器・陶磁器 (4) (1/4, 1/3)

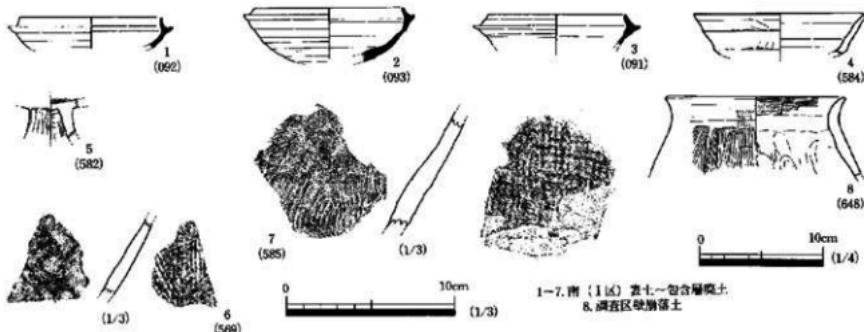


図16 表土～包含層壠土ほか出土土器 (1/4, 1/3)

器の壺（塊？）。28は黒色土器の塊。29は上師質に近い軟質焼成の縁輪で、薄緑色の透明釉。同産のものか (Ph.1)。30は11と同器種・同型式。31, 36は赤焼土器。31は外面細かい格子目（縦格子？）タタキ、内面同心円文当具痕。36は擬格子タタキ。32～35はSK675出土。32は弥生後期前半の壺の底部。33は8世紀前半の須恵器壺身。34, 35は瓦器塊。（図12）1, 2は赤焼土器（断面黒塗りは誤り）。1は縦縞文、2は擬格子のタタキ。1の内面は重弧文？当具痕、2は重弧文または平行文当具痕→一部ハケメ。3は陶質土器で平行タタキ十鳥足文タタキ。タタキ後肩部ナデ、ナデのような螺旋沈線（左下がり）。内面はヘラ工具ナデ (Ph.15)。4, 7, 26はⅢB～Ⅳ期の須恵器壺蓋。11はⅢB期、18はⅢA期、29はⅣ期の須恵器壺身。9は内面当具痕ナデ消し、外擬格子タタキの須恵器壺の底部。5世紀後半から6世紀前半か。5は外面縦縞文タタキ、内面無文当具痕ナデ消しで韓式系上器の概か。8は古墳後期の土師器壺。12は古墳中期の土師器鉢。13は古墳初頭ⅡA期の小型丸底壺。14は古墳後期の丸底壺。15は古墳初頭の布留系広口壺。16は古墳前期末の二重口縁の丸底壺。16は須恵器高壺の脚部。17は古墳中期の、20は古墳前期後半の高壺の壺部。19, 21, 24は弥生後期後半。25は古墳前期の二重口縁壺の頸部か。26は直立する口縁部タイプの二重口縁壺。23, 28は土師器小皿。27は土師器小壺。30は青磁の小碗。高麗青磁か。（図13）1は上師器の瓶（重出）。2, 6は赤焼土器（2の断面黒塗りは誤り）。いずれも外面縦縞文タタキ。2の内面は平行文当具痕→ハケメ、頸部ナデ。6は平行文（重弧文？）当具痕→ハケメ。3は古墳前～中期の手すくねの小壺。4は上師器小皿。底部ヘラ切りで11世紀か。5は筑前型庄内壺の破片。7は弥生後期中壇～後半の壺の底部。8は古墳後期の壺の底部の破片か。9, 12, 13, 23はⅣ期の須恵器壺身。10はⅣ期前半の須恵器の壺状の鉢ないし壺。11は赤焼土器の壺。外面縦縞文タタキ、内面同心円文？（重弧文？）当具痕→ナデ、下部ケズリ。14, 15, 21は古墳後期（～7世紀前半）の精製丸底壺。17は瓦器塊。18, 22は弥生後期中壇の壺の底部。19は古墳初頭の東海系高壺 (Ph.10)。色調赤褐色で外面タミガキ。20は古墳前期後半の高壺壺部。24は5～6世紀の土師器壺の把手。25は土師質だが内面にガラス滓があり堆塗か。（図14）1は赤焼土器の壺。外面縦縞文タタキ、内面平行文十重弧文当具痕。2は白磁片。3, 4はⅢB期の須恵器壺蓋と壺身。5は赤焼土器の鉢。胴部外面平行文（縦縞文か）タタキ、内面板ナデ。古墳中期か。6も赤焼土器の鉢。外面細かい縦縞文タタキ、内面無文当具痕→ナデ。7は外面格子目に近い縦縞文タタキの須恵器。内面ナデ。5世紀代の古式須恵器か。8は韓式系軟質土器 (Ph.12)。外面縦縞文タタキ。内

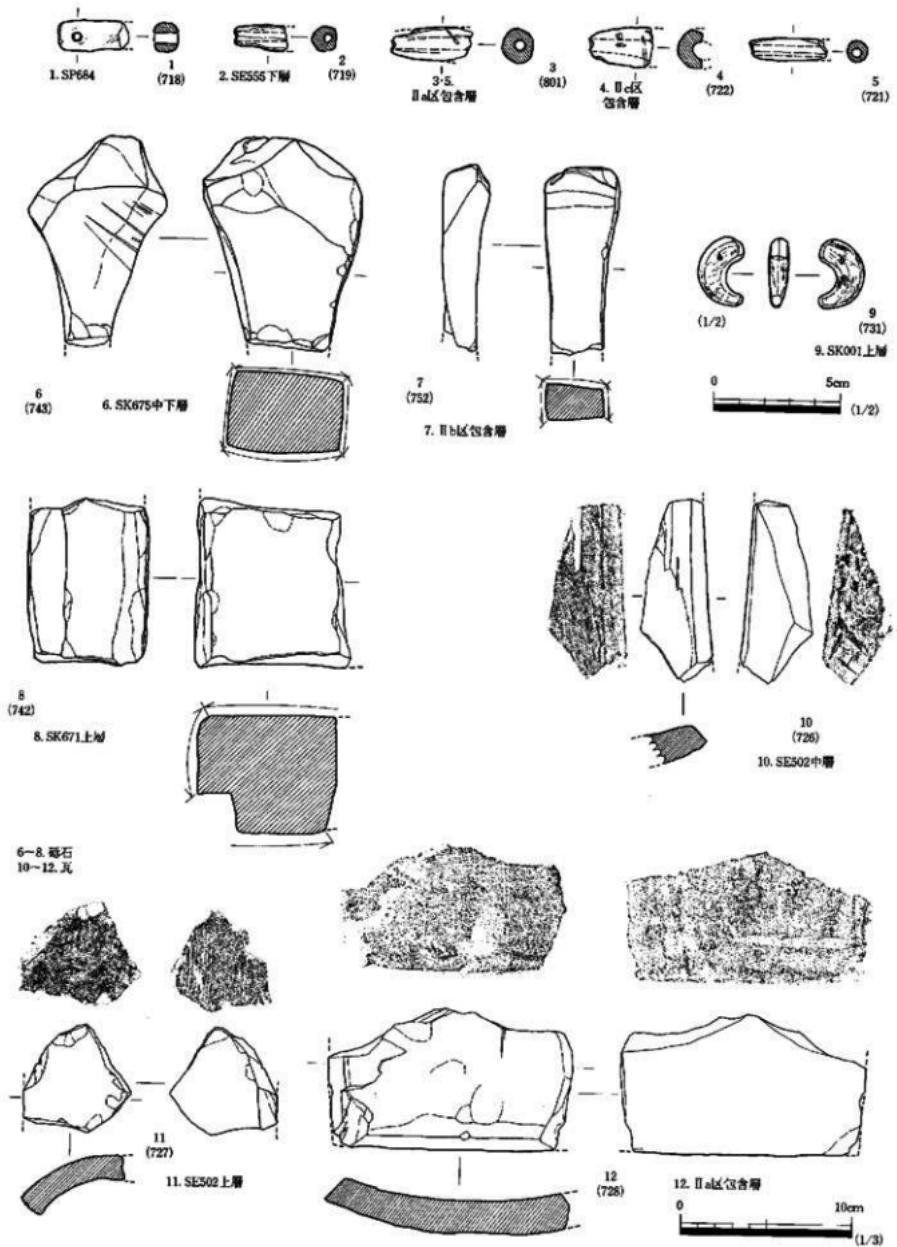
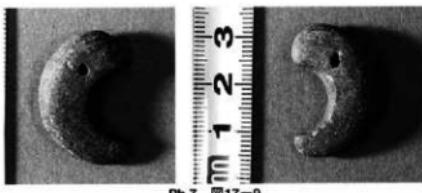
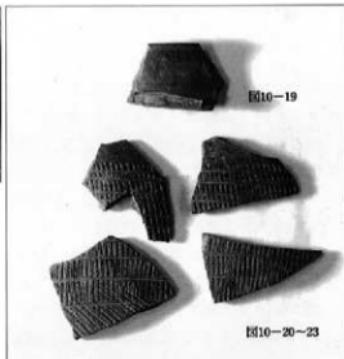


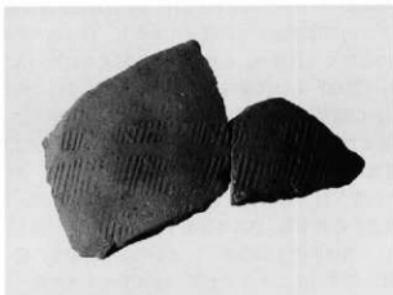
図17 その他の遺物実測図 (1/3, 1/2) \*勾玉のみ1/2



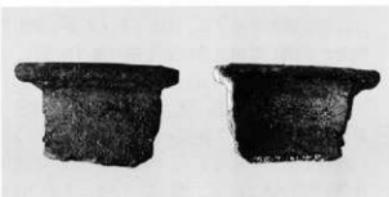
Ph.7 図17-9



Ph.8 同一個体と思われる陶質土器片



Ph.15 鳥足文タタキ陶質土器片 (図12-3)



Ph.9 濑戸内系土器 (図10-13)



Ph.10 東海系土器 (図13-19)



Ph.11 韓式系土器 (図15-15)



Ph.12 韩式系土器 (図14-8)



Ph.14 二重口縁壺 (図11-26)



Ph.13 韩式系土器 (図14-9)

Ph.7~15 吉塚7次出土遺物写真 (2)

面ナデ。9は韓式系軟質土器の平底鉢(Ph.13)。外面ナメの平行タタキ、底部上はケズリ。底面方形ゲタの痕跡。内面はハケメか(在地産か?)。10は古墳後期の土師器甕。11はⅢA期の須恵器高坏。12、19は弥生後期前半の壺・甕の底部。13はⅢB期頃の須恵器高坏の蓋か(カキメあり)。14は古墳後期ないし奈良時代の土師器甕の把手。22はⅣ期の須恵器高坏の环部。23はⅢB期頃の須恵器高坏の蓋の一類。21は古墳中期の高坏脚部。24は白磁碗Ⅳ類。18は須恵器の壺(壺?)の口縁部。ⅢB~Ⅳ期。15~17、20は赤焼土器。15は格子目タタキ、内面は浅い(無文に近い)同心円文当具痕。16は甕。外面格子目に近い擬格子タタキ後カキメ状ヨコハケ、内面は重弧文当具痕→ヨコナデ。17は細かい繩轡文タタキと粗い平行タタキが上に切り合う。内面無文当具痕か。赤焼土器でも韓式系に近い古相か。20は繩轡文タタキ、内面浅い同心円文当具痕。(図15)1は白磁碗底部による瓦玉。2は古墳後期(~7世紀前半)の精製丸底鉢。3は須恵器の甕の口縁部。羽状の斜線文。Ⅳ期か。4は赤焼土器の甕。外面は平行文に近い擬格子タタキ、内面は重弧文当具痕→ハケメないし平行文当具痕。5、6は北部九州型布留甕。7はその系統だが古墳前期末に粗雑化したもの。8は白磁碗Ⅵ類(博多分類)。9はⅣ期初頭の須恵器坏身。10は弥生後期中頃の壺の底部。11、12は古墳前期末~中期の高坏环部。13は古墳初頭の在地系鉢。14はカキメのある須恵器技法の赤焼土器。15は外面格子目タタキ(ナデ消し)、内面ナデ消しの韓式系軟質土器の甕(Ph.11)。16は古墳後期の土師器甕。17は小型の土師器甕の把手か。18は土師器の(高台付)甕。9~10世紀。19は支脚状のミニチュア土器。20は平行タタキ後一部カキメの古式須恵器の甕。21は古墳前期の鼓形器台の粗雑な模倣品か。22、27、28は奈良時代の土師器甕。23は韓式系?軟質土器。外面繩轡文タタキ、内面ナデ。24は赤焼土器の甕。外面は平行文に近い擬格子タタキ後カキメ、内面は重弧文(同心円文?)当具痕。25は弥生終末古相の高坏。26は弥生後期初頭の甕の底部。(図16)1~3はⅣ期の須恵器坏身。4は8~9世紀の土師器坏か。5は6~7世紀の上師器の精製高坏。6、7は赤焼土器。6は繩轡文?(斜めの擬格子?)タタキ、内面浅い同心円文当具痕。7は甕と思われ、格子目に近い擬格子タタキ、内面は重弧文当具痕→ナデ。8は古墳後期の土師器の甕。(図17)1~5は土錐(七製沈子)。古墳時代から中世まで形態変化が少なく時期限定できない。6~8は砾石。6、7は砂岩ないしシルト岩。8はシルト岩。9はやや硬質の滑石製勾玉。穿孔が丁寧で両面穿孔の可能性あり。研磨も丁寧で比較的古相の型式か(古墳中期前半か)。10~12は瓦。10、12は平瓦。11は丸瓦。11世紀頃の遺構に伴うか。吉塚遺跡群内では806年(大同元年)開山と伝える東光院が本調査地点の南200mにあるが、関連があるのか今後注意されよう。なおその他の遺物では、図示できなかったが包含層から鉄製品若干と鉄滓がパンケース1箱弱出土している。

#### IV. おわりに

吉塚7次調査では、限られた面積でありながら予想以上の濃密な遺構と多種多様な遺物が出土した。したがって調査成果も小さくないものがあるが、諸種の制約により一部しか報告できず、また記述説明も不十分になってしまったことをおわび申し上げたい。なお本調査地点周囲の今後の調査にあたっては、層序の上からも2面の調査が望ましく、また「包含層」は実際はほとんどが遺構の集合体であり、多様な特色ある遺物が含まれることから人力掘削による遺物の検出が必要不可欠である。「赤焼土器」については、繩轡文や格子目タタキを有するものは韓式系土器との区別が困難なものもあり(初現は古墳中期になろう)、この種の土器は博多湾岸の遺跡に限られて分布する可能性が高く、渡米人が在地化していく過程も想定すべきであろう。問題は須恵器工人との関係だが、タタキ整形の物に限って言えば、器種も甕・鉢・瓶があり、この種の土器の機能を「玄界灘式製塙土器」のみに限って想定するのは必ずしも正しくない。本調査では、土器の遺存率が悪く、また(→裏表紙裏に続く)



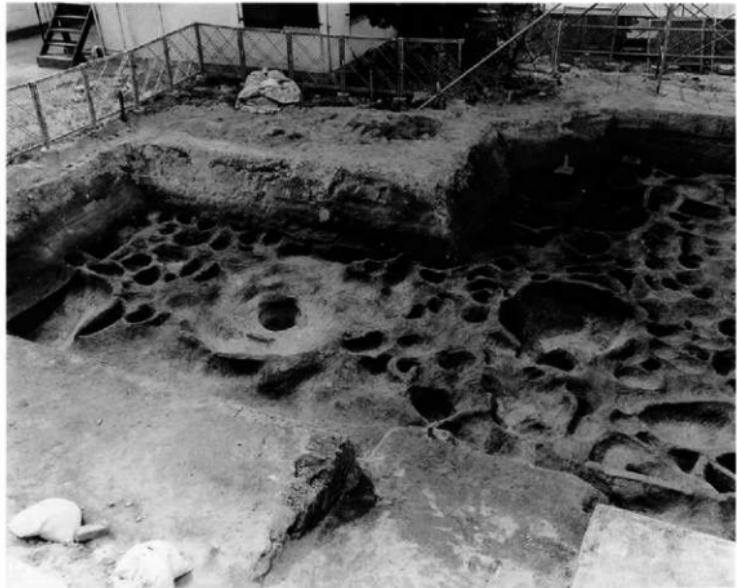
1. I区全景(南から)



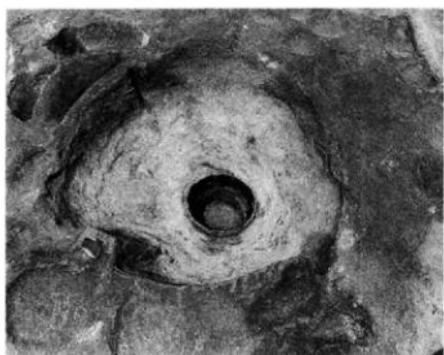
2. I区全景(西から)



3. II区全景（北から）



4. II区全景（南から）





12. SE502上～中層土層（東から）



13. SE555完壊状況（南から）



14. SX641出土状況（西から）



15. SK669出土状況（南東から）



16. SK021・024出土状況（南西から）



17. SK501（Ⅱ区側）掘削状況（東から）



18. SK671土層状況（西から）



19. SK033・034土層（西から）

(→p.24から) 共伴関係も明確ではないので検討にも限界があるが、今後「玄界灘式製塙土器」や韓式系上器の在地化、須恵器との関係を含めた分類や変遷の整理が必要である。なお「赤焼土器」の内面調整に、ハケメに見誤るような平行文および重弧文(?)ただし同心円文にはならない)当貝痕がみられることが注意される(難しいのはハケメ自体も存在することである)。また一見無文状の浅い同心円文当貝痕もあるのは古式須恵器と同様である。本調査で興味深いのは、搬入の可能性の高い韓半島の陶質十器や韓式系軟質土器が小面積ながら複数検出されたことである。このことから吉塚遺跡群は、古墳時代中期における対外交易の中継地、また「赤焼土器」のあり方から、渡来人の一時居留地の可能性が認められるのではないか。同様の遺跡には西区生ノ松原遺跡があり(福岡市報告第654集)、類似する韓式系軟質土器や陶質上器が出土している。また西区吉武遺跡群の古墳時代中期前後の集落では、同様の半島系上器や韓式系の在地化した土器が多量に出土しており(近年中報告予定という)、集落規模も大きく、当時の拠点的な集落であろう。また糸島地方では、深江湾岸の遺跡群や二雲遺跡群などでの古墳中期の韓式系上器、陶質土器の検出例も多くなってきている。このように、当時の集落間の交易ネットワークや渡来人の足跡を検討できる段階になりつつある。その意味でも、吉塚遺跡群の調査は今後注目されるところであり、調査条件などについても十分検討する必要性があることを指摘して報告書の結びとしたい。限られた紙幅であまりにも多くの調査成果を詰め込んでしまったために、かえって分かりにくい報告書になってしまったことをおわび申し上げたい。

遺跡調査番号	9908	遺跡略号	YSZ-7	分布地図番号	035-0123
調査地地籍	福岡市博多区吉塚3丁目355-6番地			事前査査番号	10-2-539
開発面積	210m <sup>2</sup>	調査面積	181m <sup>2</sup>	調査期間	1999年4月12日~5月29日

## 吉塚 7

—吉塚遺跡群第7次調査の概要—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第665集

2001年(平成13年)3月30日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 さつま印刷株式会社

福岡市博多区吉塚1丁目9-7

